

## 形容詞の活用 確認テスト（ク活用・シク活用） 解答・解説

### ■ 解答・解説

問1 シク活用。「うつくし」に「なる」を付けると「うつくしくなる」となり、「～しくなる」の形になるのでシク活用。

問2 うつくし。

問3 ク活用。「高し」に「なる」を付けると「高くなる」となり、「～くなる」の形になるのでク活用。

問4 連体形。「高き」は下に体言「を（…もの・こと）」に準ずる形で、ここでは「高きを」と格助詞「を」が付き、体言の働きをする連体形。本活用「く・く・し・き・けれ・○」の連体形「き」。

問5 高し。

問6 ク活用。「遠し」は「遠くなる」となるのでク活用。

問7 連用形。「遠くして」の「遠く」は下に接続助詞相当の「して」が付き、用言・動作に続く連用形。本活用「く・く・し・き・けれ・○」の連用形「く」。

問8 ク活用。基本形は「めでたし」で、「めでたくなる」となるのでク活用。傍線部「めでたかり」は補助活用（カリ活用）の連用形だが、活用の種類自体はク活用。

問9 「めでたかり」の下には過去の助動詞「けり」が付いている。形容詞の本活用には助動詞が直接付きにくいので、ラ変動詞「あり」と結びついでできた補助活用（カリ活用）の連用形「めでたかり」を用い、そこに「けり」を付けている。

問10 寒く（なって）。「夜寒くなりて」で「夜が寒くなって」の意。

問11 已然形。「清ければ」は下に接続助詞「ば」が付いて確定条件（…ので）を表す已然形。本活用「く・く・し・き・けれ・○」の已然形「けれ」。

問12 ク活用。「なし」は「なくなる」となるのでク活用。語尾だけ見ると「し」で終わりシク活用に見えるが、「なる」を付けて判別すること。

問13 明かき。本活用「明し」の連体形は「明かき」。傍線⑧は補助活用（カリ活用）の連体形「明かかる」だが、本活用の連体形に直すと「明かき」となる。

問14 シク活用。「うれし」は「うれしくなる」となるのでシク活用。

問15 うれし。

問16 已然形。「すさまじけれど」は下に接続助詞「ど」が付く逆接の確定条件で、已然形「けれ」。

問17 風が（ものすさまじく）荒々しいけれども。「すさまじ」は「もの寂しい・興ざめだ・荒涼としている」の意で、ここでは「風が冷たく荒々しいけれども」の意。

問18 シク活用。「あさまし」は「あさましくなる」となるのでシク活用。

**問19** もとの形容詞の終止形は「恋し」、活用の種類はシク活用。「恋しさ」は形容詞の語幹に接尾語「さ」が付いて名詞化したもの。「恋しくなる」となるのでシク活用。

---

**問20** 未然形。「苦しからむ」は下に推量の助動詞「む」が付くので未然形。補助活用（カリ活用）「から・かり・○・かる・○・かれ」の未然形「から」。

---

**問21** 苦し。

---

**問22** 「苦しから」の下には推量の助動詞「む」が付いている。助動詞「む」は未然形に接続するが、形容詞の本活用には未然形がなく助動詞も付きにくいいため、補助活用（カリ活用）の未然形「苦しから」を用いて「む」を付けている。

---

**問23** シク活用。「うるはし」は「うるはしくなる」となるのでシク活用。

---

**問24** (1) 本活用（連用形「遠く」）。(2) 補助活用（カリ活用の連用形「めでたかり」）。(3) 補助活用（カリ活用の連体形「明かかる」）。(4) 補助活用（カリ活用の連用形「かしこかり」）。

※カリ活用は「から・かり・○・かる・○・かれ」と、ラ変動詞「あり」が付いて変化したもの。

---

**問25** その形容詞に「なる」を付けてみて、「～くなる」となればク活用（例・高し→高くなる）、「～しくなる」となればシク活用（例・うれし→うれしくなる）と見分ける。語尾の「し」だけでは判断できないので、「なる」を付けて連用形の形で確かめるのがよい。

---